

やはり姉さんの性格は  
終わっている

meigetu

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

面白半分で、俺ガイルの世界にインフィニット・ストラトスの東さんを長女として雪  
ノ下家に放り込んでみました。

俺ガイルの世界を中心に書いてるのでインフィニット・ストラトス要素はほぼない  
です。

多少キャラ崩壊がある可能性があります。お気を付けて。

目

次

第一話 兎登場

第二話 肝試し

三話 文化祭

四話 文化祭二日目

五話 文化祭後

54 40 28 16 1



# 第一話 兎登場

「う： うーん。」

と、スズメたちがちゅんちゅんと鳴いている音を聞きつつ、二日酔いからか痛む頭を押さえて平塚静は起き上がるうとする。

しかし、何かに抱き着かれているのか一向に体が持ち上がらない。

何事か、と思いつめを開けるとそこはログハウスの中であつた。

「確か： 林間学校の千葉村に來ていたのだつたか：」

と、寝起きの回らない頭で思考する。ふと、隣を見てみるとなぜか、特徴的な機械的なうさ耳がピコピコしている。

「…… 束：」

と、あきれたように声をかけると、垂れ下がっている耳の部分がピコンと持ち上がる。

「束： 何しに來た？」

と、あきれつつ改めて声をかけると、顔をこちらに向けてきた。

その顔は軽く頬を染めており、特徴的な紫の長髪に特徴的な機械のうさ耳がのつかつていた。

「昨日、あんなに激しく、シてくれたのに、そんなに冷たい反応…ひどい。」

と、布団のタオルケットで半分顔を隠しながら、およよと泣き出す。

私は、その態度に半分イラつきながら、

「君は、毎回それをしないと気が済まないのか？」

「いいじやん。いいじやん。でも最近、反応が詰まんない。初めてこれやつた時、相当慌てていたのに…」

「それは、何回もやられればそうなるだろ。はあ。それで、何の用だ？」

「このまま話を続けていても埒が明かないと感じ、話を切り替える。

束、いや雪ノ下束は、空気が変わつたことを感じたのか、私が入つている布団を抜け出し、

「妹たちと、静ちゃんに会いに来たんだよ。ついでに、気晴らしに来たんだよー。」

と、一回転してから服についた、埃を手で払いつつ言う。

服は、いつも通り水色と白が混じつたメイド服のような服を着ていた。

「妹… 雪乃のことか。」

「そうそう、もうそろそろ高校二年目だしうまくやつているのかなと思つてねー。ついでに帰りに陽ちゃんとも会うつもりだしね。」

「そ、そ…うか…」

「そうだ、じゃあ朝食、食べに、いこつか静ちゃん。」

と、一目散に玄関に向かつた。

私は、相変わらずのその身勝手さに頭を痛めてつつ、食事へ向かつた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あ、雪乃ちゃんだ、だーれだ。」

「え、えええ」

と、食堂で朝食を座つて待つていると、唐突に目隠しをされた。隣から、由比ヶ浜さんの驚いた声が聞こえる。

このようなことを、それも人前ができる人はあの人しかいない。と確信をもつて、

「姉さん…なぜここに…」

「姉さん？　え、え？」

「いやー、ばれちやうとは。さすがは、私の自慢の妹だね。」

と目隠しをしていた手をどけて首の後ろから抱き着かれる。と、同時に頬を後頭部に擦り付けられる。

「東姉さん、やめて。」

「そんなこと言つちやつて、本当はうれしいんでしょ。」

と、さらに強く抱き着かれる。

めんどくさから、半分無視をしていると、唐突に隣から、

「え、え、どうゆうこと?」

と、由比ヶ浜さんの困惑した声が聞こえる。

しかし、東姉さんは、何も聞いていないように話を始める。

「ねえねえ、それで、最近どう? 学校楽しい?まあ、静ちゃんがいるから問題ないけどね。それとそれと、陽乃ちゃんは元気してる? 最近用事が多くて来れてなかつたからねー。」

と、まくしたてる。

いつも通りの東姉さんだと思い、この状況に、半分あきらめていると、

「ゆきのん、どういうこと?」

と、由衣さんは困惑したように再度聞いてくる。

あいも変わらず、東姉さんは相も変わらず、

「うーんと、まあいいや。それでねそれでね、新しいバージョンの宇宙服みたいなものを作つたんだよ。どうどう、近いうち私のラボに来ない? 雪乃ちゃん。宇宙だつて、簡単に飛び出せるんだし来るよね、ね、ね。」

などと、話を続ける。

と、同時にパーンという小気味がよい音が耳に入ってきた。

「いたーい。ひどいよ静ちゃん。」

そちらに視線を向けるとそこには丸めた新聞紙を持つている平塚先生がいた。

「はあ、陽乃しかり、生徒の前でその呼び方はやめてくれと何度も言えどわかるんだ。」  
と、頭痛が痛そうに頭をおさえる。

「まあいいじやーん。静ちゃん、それでどうしたの？」

「はあ。何度も言えばいいんだ。まあいい、もう少し前は他人に興味を持って。」

と、平塚先生は諦めたように言う。

「オッケー。最大限善処するよ静ちゃん。」

「善処つて。やる気ないだろ。」

「てへっ。ばれちやつた？」

と、右手の拳の自身の頭にぶつけて愛想のよさそうに笑う。

平塚先生は、ジト目でいるのを見ながら苦笑いをこぼした。

「ゆきのん、ゆきのん。あの人だれ？」

と、由比ヶ浜さんが聞いてきた。

「あの人は、私の姉よ。」

「姉？」

「そう、雪ノ下束。私の七歳上の姉よ。」  
と、言いながら、私の優しい姉は、あいも変わらず平塚先生にちょっとかいをかけていた。



「それと……最後に今日付けて、ボランティアサポーターになつた人がいます。」

と、一通りの今日の行程の説明をした後、平塚先生は話を切り出した。

俺は、なんだと思い、視線を平塚先生の方向に向けると、平塚先生の近くのテーブルに二つのウサギのような耳がぴょこぴょこ動いていた。

「なんだあれ？」

と、独り言をこぼすとその正体は唐突に立ち上がった。

その正体は、兎耳を付け、水色と白が混じつたメイド服を着ている紫の髪を持つてい る女性だつた。

コスプレか何かか？と思ひ、視線をそちらに向けるそこでは、平塚先生と、うさ耳を つけた女性がじやれていた。

周りを見渡してみると、おおよそはなんだこいつという苦笑いを浮かべているが、雪ノ下と、葉山は違つた。

雪ノ下は何やらあきらめたような顔を、葉山はなぜかふだん見たこともないほど顔を青ざめさせていた。

観察を続けていると、

「ほら自己紹介しろ。」

「わかったよー静ちゃん。<sup>しず</sup>めんどくさいな。私が大天才の東さんだよ。ハロハロ。」

と、一回転して手を振つてゐる。

と同時に周りが騒がしくなる。

「束つて、あの束ですか？」

「たつた、四回の講演で物理学を十年分進めたといわれてゐる。」

「どういうことだ？」

全く話に追いつけないので近くにいた戸塚に聞いてみる。

「なあ戸塚。束つて誰？」

「もしかして、八幡、束博士を知らない？」

「ああ、そうだ誰だそれ？」

「そう。本名は雪ノ下束、こここの高校の卒業生で四年前から年に一回うちの高校で物理

学の公演をやつてくれるんだよ。」

「雪ノ下?」

「詳しくは知らないけど…… 雪乃さんの姉なのかもしれないね。」

「そうか……」

と、戸塚と話していると、

「束は、私の昔の教え子で、総武高校卒の先輩だ。」

「うんうん、そうだよ。私はみんなの大先輩にあたるわけです。あやめ奉り給え。」  
と、束さんは、腰に手を当てて胸を張る。

「いい加減にしろ。束。」

「いいじやーん。ここで序列付けしておかないと、後輩たちになめられちゃうからね。」  
「はあ〜。」

という、平塚先生の深いため息が聞こえてきた

「埒が明かん。まあ以上だ。お化けの仮装セットはおいてあるそうだ。手分けしてやつ  
てくれ。」

『はーい』

という声と苦笑いとともに解散した。



「それで、 静ちゃんは何するの？」

「静ちゃんいうな。」

と、朝食を取り終えた後、一人で並んで廊下を歩いていた。

「いいじやんいいじやん。現に陽乃ちゃんんだつて静ちゃんのこと、 静ちゃんつて言つてるんだし、問題ないでしょ。」

と、言い、どこから取り出したのかスケートボードのようなもので平塚静の周りをぐるぐる回りながら言つた。

「はあ。相変わらずだな、お前は。」

「当たり前でしょ。私が変わることなんて、たとえ空が落ちてきてもあり得ないことだよ。」

と、スケートボードの上で逆立ちをしつつ答える。

「だろうな。24になつてもこの調子じゃ自明の理だろう。」

と、あきらめたように言う。

「そうだよ。それよりも…… 静ちゃんは、結婚できそうなの？うーんと、あと、一年で。」

「ウツ。それは……」

「大丈夫だよ。アラサーじゃなくなつたら、私がもらつてあげるからね。あの時確約してくれたしね。」

と、いつもの束らしくないことを言う。

「勘弁してくれ。あの時は友達の結婚式に誘われていてやけ酒していた時なんだ。」「え？ なんだつたけ？ むしろ、束がいい。できれば私をもらつてくれ。だつたつけ。」と、雪ノ下束は、恥ずかしがつてうつむいている平塚先生の顔をしたからのぞき込むように言う。

平塚先生は恥ずかしがるように顔を覆い隠す。

「やー。やっぱ静ちゃんかわいい。もう、結婚しよ。」

と、後ろから抱き着こうとするがアイアンクローラーで止められてしまう。

「痛い痛い。親指と小指でこめかみをぐりぐりしないで、頭、頭割れる。」

「聞き分けの悪い兎はこれぐらいに処しておいた方がいいだろ。」

と、平塚先生は顔を真っ赤にして雪ノ下束の頭をぐりぐりしていた。

「で、結局私は何やればいいのかな静ちゃん。」

「はあ。夜から、肝試しをするから倉庫に向かいその準備をしておけ。」

「オッケー。了解ー。この大天才の束さんにまつかっせつなさい。」

と、指示がもらえてうれしいのか束は嬉しそうに兎の耳をひょこひょこさせて周りを飛び跳ねていた。

「束。森全体を霧の海にするみたいな変なことはするなよ。仮装道具を倉庫から持つてくるだけで……て、もういないし……」

私は、長年束と付き合ってきた経験から嫌な予感を感じ、くぎを刺そうとしたが、そこにいるであろう束はいなかつた。



「姉さん、何してるの？」

と、言う声で、私は作業を中断した。

この声は雪乃ちやんだ。

「雪乃ちやん、どうしてこんな倉庫に来ているの？」

「私は平塚先生から、肝試しの衣装を取りに倉庫まで来たのだけど……」

「なんだ！今ね、私も肝試しの準備をしていたんだよ。」

と、宙に浮かんだディスプレイを見せる。

「そ、そうなの。じゃあ、私はここで……」

と、コスプレ衣装が入った段ボールを二段重ねにして雪乃ちゃんは出ていこうとする。

今にも倒れそうで、非常に危なさそうだ。

「そういう時は手伝つてって言つてといったでしょ。雪乃ちゃん。」  
と、雪乃ちゃんが両手で抱えていた二段重ねの段ボールをかつさらう。

「姉さんの手を煩わせるわけには……」

「問題ないよー。それに私のお姉ちゃん道を守るためにも手伝うんだよー。」

と、片手で段ボールを持ちながら、胸を張る。

「そ、そう。」

と、困惑する雪乃ちゃんを横目に私は部屋の外へと飛び出した

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「おー、雪乃ちゃんこの子が気になるの?」

私は静ちゃんの手伝いのために他の人のコスプレ衣装の手伝いをしていると、雪乃

ちゃんが化け猫であろうコスプレをした女の子の猫耳や尻尾を触っていた。

「やっぱ、雪乃ちゃんは、猫が好きだね。」

「… そんなわけないじゃない」

「そういわないでよ。それよりも化け猫のコスプレの子こっち来てよ。」

と、女の子に声をかける。

「は、はい。」

と、言いこちらに向かつて来た。

「その中途半端な猫耳のカチューシャと、尻尾を外してこれと、これをつけてみてよ。」  
と、私が開発した猫耳のカチューシャと尻尾を差し出す。

「は、はい。」

と、何やら警戒したようにその女の子は恐る恐るこれらを身に着けた。  
私は一通りそれを確認した後、

「うーんとね、そうだなあ… ちょっと怒つてみてよ。」

「急に怒れと言われましても…」

「なんでもいいよ。感情さえあれば問題ないから。」

「そういわれましても…」

と、困った顔をする。

耳はピンと張られており、尻尾はたらんと垂れていた。もし、できれば怒りの感情を持てば耳をぴんと張つて尻尾を逆立てるはずなんだけど……と、原因を探つていると、

「すごいわ、姉さん。」

と、なぜか、雪乃ちゃんは目をキラキラさせて女の子のしつぽを触りに行つた。「ゆ、雪乃さん??」

と、女の子は何やら困惑をしている。

「ちよつと、失礼するわね。」

と、雪乃ちゃんはのどあたりを触つた。

すると、女の子からコロコロという鳴き声が聞こえてきた。

おお、私の発明品は故障していなかつたぽい。

「え、え??」

「すごいでしょ。これ。これはね、猫そつくりになれるものだよ。感情表現も猫そつくりになるし、仕草とかも猫そつくりになるものだよ。ついでに猫とも会話できるんだよ。どうどう、すごいでしょ!!」

と、胸を張つた。

「えーっと、どうやつたら元に戻るんですか……」

と、隣の濁つた眼をした少年が聞いてきた。

「尻尾とかを外すと、元に戻るよー。それよりも雪乃ちゃん、これつかう？」

と、服のポケットから猫じやらしを取り出す。

軽く振り回してやると女の子が困惑してる声を止めて、猫じやらしを目で追っている姿が目にに入った。

「姉さんそれかして。」

と、ひつたくるようにそれを奪われる。

雪乃ちゃんがそれを振るたびに、女の子の顔が動くのを見つつい仕事をしたな」と  
思い私は、別の仕事へと向かつていった。

## 第二話 肝試し

「ごめんなさいね… 小町さん。」

「いえいえ、まさかこんなことになつてしまつとは…」

雪ノ下 束が退室した後、雪ノ下 雪乃是比企谷小町に謝つていた。

「でもすごいですね、これ。」

「そうね… 姉さんがいつもつけているうさ耳と同様のものだと思うのだけど改めてみるとすごいわね。」

と、取り外されたカチューシャ型の猫耳と尻尾に視線を向ける。

「あの人って、雪乃さんのお姉さんなのですか？」

「あら、気がつかなかつたかしら。小町さん。雪ノ下の姓があるからすでに気が付いているものだと思っていたけど… 束姉さんは私の七つ上の姉さんよ。」

「姉だつたのか。意外だな。」

「そうね… 正直、私もあの人のお姉であるとは今でも信じられないわ。」

と、雪ノ下はうつむく。

「そういえば、もう一人姉がいなかつたか？」

「ショッピングモールであつた、陽乃姉さんのことかしら？」

「そうそう、陽乃さんしかり、お前の姉さんすごい人だらけだな。」

「そうね‥ 東姉さんは私が数百人集まつたところで追いつける気がしないもの。」

「そうじやねーよ。」

と、同様の件になると思いつつ俺は口を開いた。

「何というか、あそこまで他人に無関心というのも珍しいなと思つてな。」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。でも私に猫のカチューシャをくれたよ。」

と、小町が口をはさむ。

「小町、東さんがお前の対応をしているときお前の要望に耳を傾けたことがあつたか？」  
「うん、まあ確かに。」

「そうだろ。だけどその反面、雪ノ下に対してはいろいろ手を貸したり話を聞いたりしている。だから今年で24、25だというのに、人に対してもここまで露骨に興味がないという態度が取れることがすごいな、と思つてな。」

「そうね‥」



「平塚先生、どうしたんですかこれ？」

と、肝試しの打ち合わせ後に、外に出てみると近くに平塚先生がそして隣に何やら繩でぐるぐる巻きにされた人がいた。

「おお、比企谷か。雪ノ下束だよ。束。あまりにも勝手に動きすぎるのでな……」

と、はあと、平塚先生は疲れたように大きくため息をつく。

「何、やつたんですか？」

「こいつは、肝試しを盛り上げるということで、ここら周辺を霧で覆わせたり強制的に月食を起こさせて月を赤くしたりいろいろなことをやっているからな。」

「え、冗談ですよね。」

と、自然と聞き返す。

平塚先生は、こういつたくだらない？はつかないはずである。現に軽く雲で覆われているが夕日が見える。

すると、平塚先生は、頭を押さえて、

「嘘しじだつたらよかつたのだがな……」

「静ちゃん。どうどう、私、頑張ったでしょ。ほめてほめて。」

と、いつの間にか繩から抜け出していたのか雪ノ下束が平塚先生に後ろから抱き着いていた。

「束、どうやつて抜け出した。」

と、とても驚いた顔をしている。

「そう私がぬけぬけと、縄にくるめられているわけないでしょ。ブイブイ」と、両手をピースして平塚先生の周りをまわっている。

「静ちゃんが、私のことを縄で捕まえてくれたから、いい加減あきらめて、束縛プレイでもしてくれるのかと思つたのに… 残念。」

と、頭の上についているうさ耳を、シュンとさせた。

「んな、わけあるか。」

「苦労しているんですね先生は。」

「はあ。本当にな。」

と、平塚先生は、遠くを見る。

「ねえねえ、静ちゃんこの後どうするの？」

「仕方がない、この後小学生の指導をするから手伝え、決して私のそばを離れるんじゃな  
いぞ。」

「幼稚園児の対応だな。」

「オッケー。まつかせて。じゃあ行つてくれ…  
と、束さんが走り出そうとする。」

それを、平塚先生は首根っこを捕まえる。

「どこに行こうとしているんだね。」

「とりあえず研究所に戻つて、小学生に言うことを聞かせるよ。」「もういい、とりあえず私の後についてこい。それだけでいいから。」

「必死だな。」

と、俺は苦笑いをこぼした。

「すまないが、肝試しのほうは手伝えそうにない。後は、任せたぞ。」と、平塚先生に視線を送られた。



肝試しが終わり、怪しく輝く赤く染まつた満月を片目にしつつ平塚静は、元凶である一匹の大きな兎を抱えながらログハウスに帰つていく。

「ところで、肝試しはどうだつたの？ 雪乃ちゃん怖がつていた？」

「んな、わけあるか。雪乃はおどかす側だよ。」

「ちえー。せつかく怖がるシーンが撮れると思ったのに残念。」  
と、落ち込んだせいか、うさ耳が垂れ下がる。

「ところで、お前印の猫耳と尻尾を付けたやつがいたが問題ないのか？」

「猫耳と尻尾……ああ、あの子ね。全然問題ないよ。あんなもの。雪乃ちゃんも喜んでくれたみたいだしね。」

「そ、そうか」

「そうだ。<sup>しづ</sup> 静ちゃんも欲しかったの？」

「いや、まつたく。」

と、平塚静はしらを切つた。

少しは興味はあつたが、言葉にすると面倒なことになるとわかつていたからだ。

「ふーん。」

と、私の顔をしたからのぞき込む。

「なんだね。本当は、ほしいんじゃないかなーと思つてね。」

「そんなわけあるか。」

と、顔をそらす。

「ほらー、顔をそらしたー。<sup>しづ</sup> 静ちゃん嘘つくとき、いつもこういう反応をするよねー。」

と、即見破られてしまつた。

「さてさて、どうしよつかな。」

と、蟹股歩きで私の周りをまわりながら全身を嘗め回すように見られる。

「そうだねー。<sup>静ちゃん</sup>一匹狼っぽいし狼っていうのはど…」

「やめろ、気持ち悪い」

「まつて、まつて、3サイズはかつていたつだけだけだよ。ほお、お胸が1・2センチの  
びttt… 痛い痛い痛い。」

と、こめかみをぐりぐりする。

そのようにじやれていると、唐突に

ぴぴ、ぴぴ、でんわ、電話だよー。

と、可愛らしい声が聞こえてきた。

束は、一瞬で私の手から抜け出し、ポケットの中からピンクのスマートフォンを取り  
出し電話に出た。

「うん、どうしたの？」

「もう結果出ちゃったの？りよーかい。」

と、軽くやり取りをすると、こちらに帰ってきた。

「と、言うわけで研究所に帰るねー。狼耳と尻尾は期待していくねー。」

と、一言を残し、私とは逆方向に全速力で向かつていった。

「本当に、嵐みたいなやつだな。」

私は、独り言ちログハウスへと戻つていつた。



サポートボランティアの役割を終えた私は、平塚先生が運転する車で総武高校の正門まで来ていた。

そこには、

「雪乃ちやーん。昨日ぶりだね。」

と、自由気ままな姉がそこにはいた。

「東姉さん…帰つたはずじや。」

「雪乃ちやんと、陽乃ちやん、二人に会えるつてわかつたからね。待機してたんだよー。ほらあそこ。」

と、東姉さんは指をさす。

そこには、こちらに向かつて走つてくる高級車が一台あつた。

「え、？」

「お母さんの考えることも見え見えなんだよねー。単純すぎてバカに思えちやうくら  
い。静ちゃんも、昨日ぶり。」

と、呆けている私を放つて平塚先生のほうに向かっていった。

「昨日、おとなしく帰ったと思ったらこれが。」

「そうだよ。それでね、これ、つけてみてよ。」

と、狼の耳と尻尾を渡される。

普通に買ったものならまだしも、東印の製品だ。つけないにこした、ことはないだろう。

私は、なんとかつけるのを避けるために、

「ああ、ありがたく受け取つておくよ。」

と、返す。すると、そういうまくことは運ぶことはなく、

「えー、せっかくだから装着してみてよ。」

「勘弁してくれ。」

「えーしようがないな。」

と、言うなり束は、雪ノ下のほうへと向かつていった。

「お、とまつたじゃん。」

と、同時に陽乃ちゃんが、車から出てきた。

「はーい。雪乃ちゃん。」

と、いつも通りの姿の陽乃ちゃんが出てきた。

と、同時に、束は、

「は、る、のちやーん会いたかつたよー。」

と、宙に飛び上がり、陽乃の首に抱き着いた。

「え、束姉さん。いたの?」

「そうだよー。陽乃ちゃんに会いに来たんだよー。」

と、頬を摺り寄せる。

陽乃は、嫌な顔をせず、手慣れているように、束の頭をなでる。

「えへへへ。」

「それよりも、雪乃ちゃんに用があるんだけど。」

と、陽乃は一通り束を撫でまわした後、雪乃に向きいう。

雪乃は、肩をびくつとさせ、陽乃たちのほうに振り向いた。

「ね、姉さん」

「どうせ、母さんが、雪乃ちゃんに帰つてこいつて言いたいだけでしょ。そんなことよりも、どう私の研究室に来ない?せつかく三人姉妹そろつたんだし。」

と、戸惑う雪乃を物理的に担ぎ上げて束は、陽乃のところまでもつっていく。

雪ノ下は、困惑を隠せない表情をしながら、

「ほら雪乃ちゃんもどう？」

「え、え？」

「即座に否定しないってことは問題なさそうだね。じゃあ行こうか。」

「東姉さんに言われたんならしようがないわね。で、どうやつていくの？」

「そりやあ、もちろん。大空を見よ。」

と、陽乃はあきれた声で言う。

束は、雪乃を、御姫様抱っこをしながら、空を指さす。

すると空より一つの金属箱が道路に落下してきた。

「それは、」

「じゃん、じゃじゃーん。」

と、束が言うと、金属箱の中身が現れた。

中には、真っ黒な車体をしたバイクと、それに付属するサイドカーがあつた。

「これは… アストンマーチンの100台限定販売の新車か？」

「おー、流石静ちゃんお目が高い。静ちゃんの車に乗つて私も欲しいなつて思つてね。

ほら乗つた乗つた。」

と、御姫様抱っこをしていた、雪乃を、サイドカーに乗つける。

「えっと…」

「ほら、陽乃ちゃんも早く後ろに乗つて。そんなわけで、今度は私のバイクで、デートに行こうね静ちゃん。じゃねー。」

と、東は、二人を乗せて走つて行つてしまつた。

「行つちやつたね…」

「そうだね。なんか、すごい人だつたね。」

「ああ、そうだな。あきれるほどすごいやつだよ東は。」

「…………」

と、皆は取り残された運転手が困つたように通話しているのを片目に話していた。

## 三話 文化祭

「うーんと、ここを、こうつなぎなおして……よし、これをここに持つて行つて……うんうん、やつた東さん大天才。」

と、雪ノ下束は、空中に浮かんでいる半透明のキーボードに向かつて高速でコードを擊ち込んでいた。

「もうすぐ、第四世代になるんだけど……一人でバージョンアップするのもなんかおかしくなつてくるね。」

と、一人でわらつていると唐突に近くから

『ぴぴ、ぴぴ、でんわ、でんわ、陽ちゃんから電話だよー』

と、言う通知音が聞こえてきた。

「もすもすひねもすく。はあーい。みんなのアイドル雪ノ下束だよー。」

「その挨拶、頭にくるからやめてくれないかな。」

「えー、ひつどーい。いいじやんいいじやん。」

と、駄々をこねる。

「はあ。まあいいわ。それより今年の総部高校の文化祭に出てくれない?」

「もうそんな時期なんだー。早いねー。でもあんな小学生みたいな授業でいいの？」

「それぐらいでいいの。」

「そつかー。まあ陽ちゃんの頼みならやるよー。」

と、返す。

「それと、できれば有志の届け出を出すときに、仕事に追われていると思うから、雪乃ちゃんのことも助けてくれると嬉しいんだけど……」

「うん？ 本当にいいの？ なんか陽ちゃん、雪乃ちゃんにいろいろとやっているみたいだけど。何かミスつたの？」

「そんなわけないじゃん。」

「ほら、一瞬、間が空いた。ほら何やつたの？ 言つてみい。」

「…… 姉さんにはかなわないわね。そうよ。総武祭の委員長を揶揄つて遊んでいたら、そうなつていたの。」

と、陽ちゃん獨白が聞こえる。

「うん？ 雪乃ちゃん、委員長じゃないの？」

「そうよ。」

「へえ、意外。陽ちゃんの後を追つかけることしかしないと思つていたのに。」

「少しは自分で考えて行動するようになつたのならばいいのだけど……」

「そつかー。この束さんにまつかせなつきい。」

と、話す。

「それよりも、はる陽ちゃん最近どうなの？」

「あ。まあいいわ。最近はね‥」



比企谷八幡は、雑務の仕事をたんたんとこなしていると、唐突に窓がバリンと、割れる音がした。

何かと思い、音がした方向に目を向けると、そこには夏合宿の時に見た、兎の耳を付け、青いドレスを身に着けた人がいた。

「なんだ‥」

「よばれて、飛び出てじやじやじやーん。束さん大登場だよ。ブイブイ」

と、両手でピースを作りながら、飛び込んできたであろう窓を気にせずに入ってきた。

「束さん‥」

「束さん。」

と、周りはそのような状況に慌てふためいている中城廻先輩と雪ノ下がそんなことを

まつたく気にしていないような反応を示す。

「ひやつはろー。雪乃ちゃん。陽ちゃんの助手ちゃん。今日は、有志団体の届け出を出しに来たんだけど……」

「有志の届け出は左奥に出して。」

「オッケー。りよーかい。」

「束さん。<sup>はる</sup>陽さんも言つていると思うけど……窓割つて入つてこないでください。  
「えーいいじyan。映画みたいでかつこよかつたでしょ、助手さん。それよりも陽ちゃんと、いつ結婚するの？」

「へ？ 結婚？」

と、そのような発言に割れた窓ガラスに夢中になつていた人たちが城廻先輩に視線を送る。

「そうだよー。普段あんなにも人間に興味を示さない陽ちゃんが、高校の間、助手さんとして雇つたんだもん。それに、同じ大学に行くんでしょ？ 付き合つてのかなーって思つてね。」

「私と、陽さんは、そんな関係じゃありませんよー。」

「えー、それは残念。<sup>はる</sup>陽ちゃん変な男ひつかけるより、助手ちゃんみたいな子がお似合いだと思うんだけどなー。」

「それに、私たち同性ですよ。」

「そんなの関係ないでしょ。私だつて静ちゃんと付き合つているんだし。」「そんなわけないだろう。」

と、いつからいたのであろうか、平塚先生がドアから入つてきた。  
「ほらー。ツンデレちゃつて。静ちゃんかわいい。」

と、東さんは抱き着く。

「そんなわけないだろう。」

「えー。静ちゃんヒモに捨てられたとき、やけ酒していい？」

「やめてくれ本当に。」

と、平塚先生ははずかしさから顔を真っ赤にさせて、東さんの口を抑えた。

「もごもご。」

「まあ、その話は、いい。それより何しに来た東。」

「もごもご。」

「平塚先生、その状態では話せないのかと。」

と、雪ノ下が指摘を入れた。

「そうだな。」

「それでね、それでね。私が養つてあげよつかつて言つた時、静ちゃんこういつたの『頼

む、私を住まわせてくれ』って。それって、一種の告白って、イフ』

「衝撃のファースト・プリット」

と、言うなり、東さんの、おなかに平塚先生の、こぶしが吸い込まれる。

「『はああ。』

と、東さんは飛ばされ、壁にたたきつけられる。

そのまま、倒れ動かなくなつてしまつた。

「平塚先生、さすがにちよつとやりすぎじゃ……」

と、言う声がちらほら聞こえてくる。

「おい、東。起きろ。」

「まあ、そんな弱いパンチじや、効くわけないんだけどね。」

どすの利いた声で平塚先生が言うと、けろつとした顔で東は何事もなかつたかのように、バク宙をして起き上がつてきた。

「まあ、要は、毎年恒例の研究発表をすることを<sup>はる</sup>陽ちゃんに頼まれちゃつてね。そのため

に有志団体の届け出を出したつていう訳だ。」

「ああ、陽乃がか。」

「そ、うそ、たぶん雪ノ下家よりも上のところからも圧力がかけられてるんじやないか  
な、よくあんな私が小学生のときに考えてた内容を聞いて喜ぶもんだよ。」

と、東は呆れたように肩をすくめる。

「あんな難しい内容理解できるわけ無いだろう。現に諸外国から大勢の有名な研究者たちが来るんだから。運営する先生の気持ちも考えてほしいな。」

「いいじやんいいじやん。そのおかげで給料少しは増えたでしょ、 静ちゃん。<sup>しづ</sup>  
「それもそうだが…」

「つと、言うわけで来たつてわけ。」

と、雪ノ下雪乃のほうに振り向く。

「はあ、とても回りくどいわね。」

「そう怒らないで、雪乃ちゃん。」

と、東は後ろから抱き着く。

「それに、委託されたんでしょ<sup>元委員長</sup>ごみに。だから許可頂戴?」

「何で知っているのよ… はあ。わかつたわ。」

「やつたー。ありがとー。雪乃ちゃん大好き。」

と、東は雪乃の頭に頬を擦り付ける。

「やめて、東姉さん。」

「いいじやーん。久しぶりに抱き着いても逃げないんだし。」

「はあ。」

「おい、東。委員会の仕事をしなければいけないから帰れ。」  
と、平塚先生が言う。

「いいけどー。午後5時。実行委員会の真つただ中なはずなのにこんなに人間がないんだね。」

と、東は両手を広げぐるりと回る。

「それは…」

「いいよー。お手伝いするよー。」

「そんな、東姉さんに、迷惑をかけられないわ。」

「うんうん、そういうことじゃないの。どうせ、雪乃ちゃん一人で仕事のほとんど把握して司令塔兼雑用として処理してるんでしょ。」

と、東は言う。

「そうだけれど。」

「それで、委員会全体をまとめるところで、陽ちゃんに追いつこうとする。大義名分兼自分で納得するのにはちょうどいい、元委員長もいたしね。というわけでしょ雪乃ちゃん。」

「…そんなわけないじやない。」

と、雪ノ下は顔を下げる。

東さんは、そんな雪ノ下の様子にもお構いなく話を続ける。

「ほらー、弱いところを突かれるとすぐ嘘をつく。まあ、それはいいとして私みたいな世纪の大天才ならまだしも、今の雪乃ちゃんじや破綻しちゃうよ。それ以上に、陽ちゃんと向かっている先が全然違うもん。」

と、東はうつむきがちになつている雪乃の顔を下から覗き込む。

「……」

「だから、今日、少し手伝うからそれまでに解決方法、要は雪乃ちゃんでも委員会を回せる方法を考えること。あとヒントになるけど……陽ちゃんも、今の雪乃ちゃんのようにひたすら仕事をこなしていたわけじやないよ。あともう一つ、大前提としても今の状況におかれている雪乃ちゃんじやあ、陽ちゃんにすらなれないただの出来損ないだよ。」

と、人差し指を立てていう。

「それじやあ、書類かしてねー。」

固まつてしまつた、雪乃を片目に、

雪乃の机の上に山積みにされた書類を手に取つて自身のキーボードに打ち込み始めた。



「本当に良かつたのか？あんなことを言つて？」

「うん？何のことかな。東さんわからない。」

と、平塚静は、東としやべつていた。

「雪乃のことだよ。」

「ああ、雪乃ちゃんのこと。」

「私が言うのもあれだが、あそこまできつく言つてよかつたのか？」

「本当のことを言つただけでしょ。」

「お前はいつもそれだな。何も恐れずそう言えるのはうらやましいよ。」  
と、平塚先生は肩をすくめる。

「それよりも……どうだつた今日のお店。」

「ああ、うまかつたな。」

「そうでしょ、うまい。軽く調べただけでも結構いい情報がばんばん入つてきたから  
おいしそううだなーと思つてきたわけ。」

「本当にうまかつたな。特に、麺はこしががあつて、そのうえにうまいこと汁が絡んでい  
る。それに、」

「静ちゃんは本当にラーメンが好きだね。」

「当たり前だ。」

「そんな、静ちゃんも好きだよ。」

と、束は抱き着くこともなくまつすぐ視線を合わせて。 いう。  
その改まつた態度に驚いて聞く。

「やめろ、恥ずかしい。 というか、なんで私がここまで、他人に対して興味がないお前に  
気に入られているんだ。」

「そりやあ、私にいろんなことを教えてくれたからでしょ。 その当時、私が全く認識して  
いなかつたことを、いともたやすく教えてくれたんだから。」

「いろんなこと？」

「陽ちゃんの件についてだよ。」

「あの件か。 私はあくまで、教師として教えただけに過ぎないんだが……」

と、平塚先生は肩をすくめる。

「そうだったとしても、私にもともと零だつたものから一にしてくれたのは静ちゃんだ  
よ。だから感謝しているの。 大好きだよーー。 静ちゃん。」

と、いつも通り、抱きついてくる。

平塚先生は、それを華麗によけ、ものの見事に地面に頭をぶつけた束を見つつ。

「最後の最後で台無しだな。」

と、一つため息をつきつつ。

しかし、この関係も悪くはないなと思う平塚静であつた。

## 四話 文化祭二日目

「物理演算から…通して…ここかな。」

と、雪ノ下束は、キーボードを打つていると通知音が聞こえてきた。

『びー。今日は文化祭二日目だよー、だよー、だよー。』

「もう文化祭の日なんだ。早いねー。よしつと。」

と、作業椅子から立ち上がる。

「仕方がない。<sup>はる</sup>陽ちゃんの頼みだし。行きますか。」



「なんか、すごい人だまりだな。」

比企谷八幡は実行委員会の広報の写真を撮りながら、外を見てみると大勢の人だまりがあつた。

そこには、総部高校の文化祭に来ることがないであろうスーツを着た高齢の人や、白衣を着てきている人、奇抜な格好をしている外国人など、中学生が全くいない高校の文

化祭ではありえない異様な風景が広がっていた。

「なんだあれは……」

「おお比企谷か。どうした。」

と、外を見て呆気にとられているのを気にしてか声をかけてきた。

後ろを振り向くとそこには平塚先生がいた。

「平塚先生ですか。外を見て言い方は悪いんですけど文化祭らしくない人が大勢いると  
思つて。」

と、外を指さす。

そこには、あいも変わらず大勢の人たちがいた。

「ああ、その件か。実行委員会で聞かなかつたか？」

「全く存じてないんですけど……」

「まあ、それもそうか。比企谷だしな。」

「なんですかそれ。やめてくださいよ。それよりも、平塚先生はこんなところを歩いて  
いていいんですか？」

と、言うと平塚先生は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「いいわけないだろう。だけどな、それ以上にやらなければならぬことがあるんだ  
よ。」

「なんですかそれ。」

「雪ノ下束の確保だよ。」

「雪ノ下束つて、あのいつもうさ耳をつけて、青いドレスを着ていて、ねじが数本飛んだ  
あの人ですか？」

「君から、そんな風に言われるとはな……まあ数本じゃなくて数十本の間違いだな。  
「そこを直してどうするんですか。」

と、苦笑いを浮かべる。

「そんなことは、いいんだ。それで、現在の外の状態につながるのだが、外にいるのは有  
名な研究者たちだよ。」

「研究者？」

「そうだ、全員、束の研究発表を聞きに来ているんだよ。」

「何それ、何かの冗談ですよね。」

と、軽く返す。

すると、平塚先生は深いため息をつきながら

「冗談だつたらどれほどよかつたか。」

と、頭を抱えていう。

「詳しくはないんですけど、そこまで研究者がいるなら学会とか行かないんですか？ そ

の束さんは？」

「行かないから、こういう状態になつているんだろう。そもそも、大学も、推薦をもらつて、いるのにめんどくさいから行かないような奴だぞ。だけど、その反面、頭だけは良すぎるからこんな状態になつていてるんだ。」

と、再度ため息をつく。

そのように会話をしていると、唐突にすごい勢いで廊下を走つてくる音が聞こえてきた。そちらを振り向くと青いドレスを身に着けたうさ耳の女性が走つてきた。

「し・ず・ちやーん。」

と、俺の頭上を空中で、一回転バク宙したと思うと平塚先生の首に抱き着いた。

「束か。」

「そうだよー。数週間ぶり。どうする、一緒に、おいしそうなラーメン屋さん見つけたから行かない？」

「研究発表をしろと、陽乃に言われなかつたか？」

「えー、めんどくさいんだけど。」

「ほら行くぞ。」

「いやだあああ。」

と、平塚先生に子供のように強制的に手をつかまれ引きずられるように連れていかれ

た。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

平塚先生の後を追つかけて体育館につくと中には文化祭とは関係なさそうな大人で、ごつた返していた。

「あら比企谷君こんなところにいたのね。」

「雪ノ下か。」

すると近くにいた雪ノ下に声をかけられた。

「すごいな、こんなに人が来るなんて。」

「それはそうよ。東姉さんは、天才だもの。私や陽乃姉さんじやあ、決して届くことのない場所にいるもの。」

「そうなのか？ 確かに来ている人数が多いと思うが……そこまでなのか？」

「そうよ。物理学界隈ではかなり有名よ。たつた、3回の研究発表で、物理学を10年も進めたとは言われているわね。」

「マジか。」

「おおマジよ。」

と、雪ノ下は肩をすくめる。

「もしかして、その三回つて…」

「多分、考えている通りだと思うわ。すべて毎年一回行われるこの総武高校文化祭の二日目に行われるものよ。」

「…だからか。」

と、この異様なほど文化祭とは関係のない人が集まっている点や、平塚先生がわざわざ文化祭の仕事があるのにもかかわらず外に出ていた理由が紐付けられた。と考えていると、

「それよりも始まるわよ。」

と、言う声が聞こえてきた。その声に舞台のほうに視線を向けるとそこにはいつもの格好をした東さんがいた。

舞台横には東さんが逃げ出さないようにするためか平塚先生と、陽乃さんがたつている。東さんはいつもの調子で研究発表を始めた。

『はーい、ここにちは！　たーばねさんだよ。』

と、言うと観客の人々が拍手を送る。

『じゃあね、今日はね、私が小学生の時に考えた物体の量子化、そしてそのデータについて話すよー。』

と、言うなり周りの雰囲気が一変し、真剣な雰囲気へと変わる。

『これを見てもらうのが早いかなー。はい、これ。見て見てー、これは本物の日本刀だよー。』

と、どこからか一本の長いさや付きの日本刀を取り出した。

『こんな感じでスパスパ切れるよー。』

と、またもやどこからか取り出したりんごを宙に飛ばし8等分に切った。

『今回は、この日本刀を量子情報に置き換えることで消すよ、3, 2, 1, ほら。』

と、一瞬でそこにあつた日本刀は何事もなかつたかのように消えた。

『今のは、ここにあつた物体を量子情報に置き換えることで消したんだよー。じゃあ、その逆、量子情報から物体に置き換えることでだしてみよつか。ほら。』

と、いうとそこには再度日本刀が現れた。

『静ちゃんもやってみてよ。』

と、東さんは、舞台袖に声をかけるとそこからいつもの格好に白衣を着た平塚先生が出てきた。

平塚先生も同様に日本刀を消し再度出現させた。と、同時にとても驚いた反応をしていた。

『ど、言う感じだね。正確にはこの日本刀を量子化させた際にこの腕のブレスレットの

部分にデータが保存されて再度呼び込むとそのデータから再構成されるつてわけだね。今回はさつき言つた通り物体の量子化、そしてそのデータについて話していくねー。じゃあ、量子化から…』

「手品ではないよな… あんな現象初めて見たぞ。」

「そんなわけ、東姉さんに限つてあるわけないじやない。」

「そうだよな… ゆきいな…」

「ほんとね。あそこまでの天才となると、一周回つてあきれしか出てこないわ。」

下を見るとそこには血眼になつてメモを取り録音をしている研究者が、頭のねじが數十本外れている天才科学者を囲むという、小説のような風景が広がつていた。

「やつたー。終わつたー。」

一時間ほどの発表を終え、東姉さんは舞台裏で私が卒業生でオーケストラの準備をするのを片目に、 静ちゃんに膝枕をしてもらつていた。

「うーん、 静ちゃんのいい匂い。」

「やめろ、 嗅ぐな。」

「それと上を見ると、もみがいのあるお胸が二つ」

と、手をワキワキさせ、揉もうとする。

「揉もうとするな。もう膝枕しないぞ。」

「いたーい。わかつたよー。」

「人が準備している横でイチャイチャしないでくれるかな。」

と、私の本番前だというのに、いちやついている二人に文句をいれた。  
「だつてー、静ちゃん。<sup>はる</sup>陽ちゃんは、私たちはイチャイチャしているお似合いのカツプル  
だつて。」

「はあ。そんなわけないだろう。」

「東姉さん、耳でも腐っているのかな？」

「だつて。もし耳が腐っていたら静ちゃん今みたいに膝枕をして看病してね。」

「はあ。」

この姉さんは、文句を言つたところで治ることはないとわかつていながらも、あきら  
めからか、ため息が自然と出た。

軽く頭を押さえていると、

「まあ、いいや。それよりも頑張つてね、<sup>はる</sup>陽ちゃん。」

と、姉さんに珍しく顔をあげ目を合わせて言われる。

東姉さんがこの反応をするときは真剣に私に伝えて いるときだ。

私は、それにこたえるように返す。

「もちろん。」

と、私は姉さんの瞳を合わせ、言つた。姉さんはそのことに安心したのか軽く笑つてから

「なら大丈夫だ。<sup>はる</sup>陽ちゃんは、私がいなくとも何でもできるから。」「何それ。」

と、軽く返す。

「じゃあ、私は、<sup>しづ</sup>静ちゃんと舞台裏で乳繰り合つてるからよろしく。

<sup>しづ</sup>静ちゃん大好き

き——。」

「やめろ、引つ付くな。」

「うーん。最後の一言は必要なかつたかな。」

私はいつも通りの姉さんに半分呆れながら演奏へと向かつていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「何？相模がいない？」

「はい携帯電話も通じません。」

「参ったわねこのままではエンディングセレモニーができない。」

「最悪、代役を…」

「ZZZZZZZZ…」

と、舞台裏で、俺は、平塚先生と、平塚先生に膝枕をされて寝ている束さん。城廻先輩そして、雪ノ下と話していた。

「最悪でつち上げればいい。」

「う、うーん…みんな、どうしたの？そんな危機迫った顔して？」

と、提案すると、膝枕をされていた束さんが目をこすりながら起き上がってきた。

「あ、静ちゃんだ。<sup>しづ</sup>どーしたの？」

「束。起きたのか。」

「そーだよー。束さんだよ。助手ちゃんも、雪乃ちゃんもなんかあつたの？」

寝ぼけ眼でいう。

「ひとまず、目を覚ませ。束。」

「いーじやん。数週間ぶりに寝ただから。多少寝ぼけていてもショーガない。」

「はあ。またそんなに偏った生活をしているのか。仕方がない、ほら起きろ。」

平塚先生は、束さんの肩を強くもむ。

「いつたーい。」

「起きたか？ 束。」

「毎回、この起こし方はやめてよね。本当に痛いんだから、静ちゃん。<sup>しづ</sup>で、どうしたの？」  
「束、相模の居場所はわかるか？」

「相模？ 誰それ？」

束さんは、本当に知らないのか、肩をすくめる。

「文化祭実行委員長の、相模さんよ。」

「へえー。そんな名前だつたんだ。じゃあ、その人間の、写真を頂戴。」

「城廻持つていてるか？」

「はい。この子ですね。」

と、城廻先輩が持つていた文化祭のパンフレットから、写真を一枚指さす。

「うーんちよつと待つていてね。うん、覚えた。」

「頼めるか？」

「いいよー。その代わり今度一緒に遊びに行こ。<sup>しづ</sup> 静ちゃん<sup>はる</sup>陽ちゃん。」

「はあ。わかつたよ。」

「私もか。」

陽乃さんはあきらめたように、平塚先生は驚いたようにこたえる。

「あつたりまえじやん。ほら、写真かして。」

と、平塚先生が軽く抗議する声を無視して、東さんは体を一回転させた後、どこからか、透明なディスプレイと、キーボードを出現させる。

「ひとまず学校の防犯カメラにハッキングを仕掛けて……うん、東さん大天才。ハッキングできた。」

「ハッキング？」

「本当にいいんですか？ 先生。」

「緊急事態だ仕方あるまい。」

「この赤髪の子でしょ。赤髪赤髪……あ、いた。こいつでしょ。」

東さんが、一分もかからずにディスプレイをこちら側に見せるとそこには、階段を上つていく相模の姿があつた。

「うーんとね。この映像は1時間前に取られた奴で特別棟の階段の写真だよー。」「それ以降のやつは？」

「ないよー。屋上とかにこもつてるんじゃない。それよりも静ちゃん。<sup>しづ</sup>せつかくだし、休日にディスティニーーランドに行かない？」

「勘弁してくれ……あそこのジェットコースターだけは……」

「えー、しようがないなー。じゃあ、静ちゃんの恥ずかしい秘密をここで……」

「わかった。泣いてでも、ジェットコースターに乗るから勘弁してくれ。」

「やつたー。じやあ、日曜日貸し切りで行こうねー。」

と、いうように、束さんはどうでもいいのか、平塚先生はと、茶番を繰り広げていた。

## 五話 文化祭後

「姉さん。最近は、どういう研究をしているの？」

と、総武高校文化祭が終わり一人で打ち上げのために向かっているとき私は姉さんに聞く。

「珍しいね、<sup>はる</sup>陽ちゃんがこんなこと聞くなんて。何々、大学卒業したら私の助手さんになつてくれるの？」

「はあ。そんなわけないじゃない。私はもう決めた道があるの。」

「えー残念。まあ、わかつていたんだけどね。」

と、私の周りをくるくる回りながら答える。

「でも、今はワープについての研究をしているよ。」

「ワープ？」

「そうそう、静ちゃんの影響を受けてアニメを少し見るようになつたんだけどそこで、確かに宇宙戦艦ヤ○トだつたつけ。宇宙空間で現在の観測位置から特定の観測位置まで一瞬で移動するつていうものがあつてね。面白そうだから、理論を組み立てたの。」

と、姉さんは何事もないかのように言う。

「組み立てたつてことは、できたの？」

「そうだよー。一週間ぐらい理論を立てるのに時間がつかっちゃたけどねー。」

姉さんは、私の周りを蟹股でぐるぐると回りながら言う。

驚きからか、能力が高すぎるゆえのあきれからか、姉さんを見る。

あいも変わらず、水色のドレスを身に着け、頭からはあいも変わらず機械的なうさ耳が生えている。

姉さんは、あいも変わらずのようだ、

「姉さんは、身なりや行動がしつかりしていれば、満点なのに…」

「えー、それじやあ私じやなくなつちやうじやん。」

「はあ、わかつていたけどこれじやあね…」

「それよりも、どう？ 最近？」

「どうとは？」

「あの人と、うまくやれてるかつてこと。あの人めんどくささだけでいえばピカイチだからね。」

と、姉さんが聞いてくる。

姉さんが言う、あの人とは、母さんのことだ。

母さんとは、最近はうまくやれている気がする。

あいも変わらず、めんどくさいことには変わらないけど…

「まあ、一応は。」

「うん、大丈夫そうだね。あの人、言うことすべて聞かせようとする割には頭が足りない人だからね。」

「そういえるのは姉さんくらいよ…」

あきれからかため息が出た。

何度、あの人振り回されたことが。そう思うと、私も姉さんによく振り回されてい  
るなども感じる。

「それよりも、<sup>はる</sup>陽ちゃんって好きな子できた?」

と、唐突に話を振られた。

あいも変わらず、私の姉さんはマイペースらしい。

「どうやつたら、そんな話の流れになるのよ。いないわよそんな人。」

「えー、助手ちゃんが<sup>はる</sup>陽ちゃんにあつてるかなと思つていてるのに。」

「助手ちゃんつて、めぐりのこと?」

「そうそう、助手ちゃん。陽ちゃんが珍しく目をかけている子だから、興味を持つたけ  
ど、純粋ないい子じやん。」

「私は男に興味があるの。女に興味がある姉さんと一緒にしないで。」

と、軽く抗議をする。

めぐりとは、単純に先輩後輩の関係だ。

姉さんが言つているような恋人関係では決してない。

「そうかなー。私は、陽ちゃんには、助手ちゃんのような包容力がある子がぴつたりだと思ふんだけどなー。あの人には、あれだし。」

と、姉さんは小馬鹿にしたように笑う。

「だから、女の子に興味がないって言つてはいるでしょ。きいてた？」

「聞いてたよー。だから、事実を述べただけだよー。陽ちゃんの周りには体目的のゴミしかいないからおすすめだと思うんだけどなー。」

「はあ。ちゃんと聞いてた？」

と、何度も言つても、女に興味がないと伝えても引かない姉さんに飽き飽きする。

これが、通常通りだから仕方がないのだが。

「うーん残念。まあいいや、そのうち気が付くでしょ。それよりもね、静ちゃん最近どう？」

と、また唐突に話を変えられる。

静ちゃんが好きな姉さんが、どうと、聞くのであれば多分、結婚できそうかどうかだろう。

「最近も、婚活パーティーを追い出されたとは聞いたね。」

「そつかー。やっぱ、人間の男の人間で、見る目がないね。あんなにいい人なのに。」「確かに、<sup>しづか</sup>静ちゃん少しざボラなどころはあるけど、しつかりとみてくれるからね。」

それに関しては同感だ。

卒業した、私の面倒を見てくれるし。

適当に姉さんの話を頷きつつこれから会う母さんの対応を考えていると、

「そうそう、だからね。アラサー過ぎても結婚できないなら私がもらつちゃうつて約束したの。」

と、言う姉さんの発言が耳の中に飛び込んできた。

姉さんと、<sup>しづか</sup>静ちゃんが仲良くしているのはよく見ていたけど、婚約していたことは初めて聞いた。

その驚きからか自然と、

「え？ どういうこと？」

と、聞いた。

「だから、アラサーになつても結婚出来ていらないなら私と、<sup>しづか</sup>静ちゃんが結婚するの。」

と、聞き間違いではないことに私は固まつてしまつた。

「おーい、大丈夫？<sup>はる</sup>陽ちゃん。」

と、姉さんが固まつてしまつた私の眼前で手を振つてゐるのが目に入る。

「それつて本当なの?」

「本当だよー。」

「そ、そ、うなんだ…」

「で、来年で静ちゃんは、32歳。<sup>しづ</sup>今付き合つてゐる人はいなから、再来年度には入籍するつて感じだね。」

「それつて本当なの?」

驚きからか二度聞く。

「本当だよ。何なら、静ちゃんに電話で確認してくれてもいいし。」

と、言われ、急いで陽乃は、携帯を取りだし、へと電話を掛けた。

『もしもし、陽乃か。ちようどよかつた。お前からかけてくるなんて珍しい。』

『静ちゃん。姉さんと婚約しているつて本当?』

『ああ、そのことか。話していなかつたか。』

『聞いたことないよ。』

正直、初めて聞いた。

『本当だよ。』

『え?』

と、軽く返されたことに陽乃から決して聞くことができないような素つ頓狂な声が出た。

『あれ、陽乃には、話していなかつたか?』

『知らないよ、初めて聞いたよ。え? 姉さんが静ちゃんに絡んでいたのはネタだと思つていたのに違うの? それはいいや、静ちゃんつて同性愛者だつたの?』

と、私も驚くほどすごい勢いで聞く。

正直、姉さんが一方的に静ちゃんのことを思つているものだと思つていた。

『陽乃、少し落ち着け。一回深呼吸しろ。』

静ちゃんに言われた通り、一度落ち着くためにも深呼吸をする。

と、同時に落ち着きを取り戻し軽く怒りがわいてくる。

『じゃあ、どういうことかな静ちゃん』

『また、また。そう怒るな。私だつて初めは、同性愛なんてありえないと思つていたさ。

今から、6年前ぐらいだつたか東が総部高校を卒業するときにな、真剣に告白されたんだよ。その時の返答は、断つたんだが、その後も何度もアタックをされてな、その時にあきらめてもらうためにもアラサー過ぎても結婚できなかつたら結婚するつて伝えたんだ。』

『ふーん。じゃあ、静ちゃんは、姉さんと婚約はしているんだ。』

『そうだ。』

『じゃあ、どうなの？結婚できそうなの？』

と、問いただす。すると、クツ、といううめき声が聞こえ、

『そななんだよ。先日また逃げられてしまつてな。いいところまで行つたんだけどな、  
グイグイ行き過ぎてひかれてしまつてな。』

と、言う静ちゃんの苦悩が聞こえる。

それよりも気になることを聞いた

『じゃあ、静ちゃんは、姉さんが好きなの？ 文化祭の時だつて姉さんにしれつと膝枕して  
いたけど。』

『……その話はあとでしよう。その話が出てきたということは、どうせ近くに束がい

るだろう。』

と、言われる。

逃がさないように私は追撃をかけようとするが、隣から

「いるよー。静ちゃん。」

と、姉さんは、この話が聞こえていたのか、私が話している電話に向かつて話しかけ

る。

静ちゃんは、助けられたように

しづか

『場をかき乱すことにに関してはピカイチだな。束』

「いやあ、それほどでも……」

『ほめてない。はあ。』

と、いつものようにあきれたように返す。

後で、絶対に聞き出しことを、私は心に決めつつ静ちゃん姉さんの話に乗る。

『それよりも、これから打ち上げに行くんだが、できれば店をおさえていてくれないか。』

『いいよー。どうする、お昼言っていたラーメン屋さんに行く?』

『私は、陽乃に頼んでいるんだが……』

『それで、誰が来るの?』

と、いつもの仮面をかぶり、答える。

『私含めて、七人いる。』

『どういった、お店がいいの?』

『なんでもある店がで、特に穴場のお店にしてほしい。』

『なんでもあるお店?』

『要は、肉とか魚とか、野菜とかいろんなものをとりあつかっているお店でしょ? 静ちゃんが言いたいのは。』

『そうだ。さすが、束だな理解力だけに関してはピカイチだな。』

『そうだ。さすが、束だな理解力だけに関してはピカイチだな。』

と、携帯越しで姉さんと、静ちゃんが話している。

しづか

『いろんなものを扱っている穴場のお店ねえ…』

『どこかありそうか？』

『そうだ、もんじや焼きっていうのはどうかな？』



「ふーん。こんなお店があつたんだ。」

「私たちは今、お好み焼きと、もんじや焼きの店に来ていた。」

「そういえば、陽ちゃん。雪乃ちゃんも成長したね。驚いた。」

「雪乃ちゃんのこと？」

「そうそう、どうどう、今の気持ちは？」

「特に何にも感じないわよ。」

と、言うと東姉さんは珍しく難しい顔をする。

「ありや、間違いだつたか。陽ちゃんのことだから妹が自分の後を追つてこなくなつた」というところからの寂しさと、それよりも、成長した雪乃ちゃんへの喜びでごちゃ混ぜになつてていると思つていたんだけど。やっぱり、人の感情つて難しいな。」

「何その感情推測。強いてそれを言うなら、雪乃ちゃんがようやく一人で歩けるようになつた安心感が強いんだけど……」

「本当にわからない。物理のほうが数倍分かりやすいよ。式さえ書けば正解なんだから。あーもう嫌だ。」

と、姉さんは、案内された座敷に寝つ転がる。

そして、どこかからキーボードと、ディスプレイを出現させ、すごい勢いでタイピングしている。

「何やつているの？」

「気持ちの方程式の改変だよ。数か月かけて作つて、正解だと思つていたのに間違えるなんて。」

「そんなもの作つていたの？」

「そうだよー。性格を数字で表して、そのうえでおこつた現象を場合ごとに数字に細分化することで、計算できるようになつていたんだけど……」

と、姉さんは透明なディスプレイを回して式を見せてくる。

そこには、数十行にもなる式が書かれていた。

「もう間違つていいけど、これが場合分け表ね。」

と、辞書のような数千ページにもわたる資料を渡される。

中には、時、場所、人数によつて細分化された数値が設定されている。

「もしかして…姉さん。」

「どうしたのー。陽ちゃん？」

「毎回計算を解いて、私たちの気持ちを、察していたの？」

「そうだよー。私には他人の気持ちがよくわからないからね。わかるようにはいろんな努力したんだけどね。無理だから計算で出せるようにしたんだよー。」

元から分かつていただけど…姉さんらしいとしか言えない。

「そ、そななんだ。ちなみに私は今何を考えていると思う？」

と、質問を投げかける。

「式が間違つていてるから出せるわけないじやん。まあ、それに代入するなら、驚きと、あきれだね。なぜかはわからないけど。」

「へ、へー。」

と、驚きと困惑からかかそんな言葉が口から洩れる。

「まあいいや、ちよつとこの後、用事ができたから先帰るね。式を改めて立て直さないといけないしね。静ちゃんと雪乃ちゃんによろしく言つといて。じゃあね。」

と、マイペースな姉さんはとつとと帰つてしまつた。